

**2021年度
傾向と対策**

傾向分析 高校英語の基礎的な知識や読解力が試されているかが問われる

1 出題形式は？

AO・推薦入学試験とも大問数は3題で解答数が合計20問となっている。また、全問マークセンス方式による四者択一の解答方式となっている。試験時間は、数学または国語と合わせて2科目で60分である。

2 出題内容はどうか？

大問Ⅰは長文読解で、本文の内容と合致する選択肢を選ぶ問題となっている。AO入試の大問Ⅱと推薦入試の大問Ⅲは、会話文内にある空所を埋めるのに文脈に合う適切な台詞を選ぶ設問である。AO入試の大問Ⅲと推薦入試の大問Ⅱは、短文の空所補充問題で、単語の意味と文法事項を問う問題が出題された。

3 難易度は？

長文問題や会話文問題で扱われている語彙などは受験英語としては平易なものであり、問われている内容も難問はなく、標準的な難易度の問題が多い。

受験対策

1 基礎的な単語・文法を固めておこう

極端に難しい知識は問われない一方で、文章や設問で扱われている語彙や文法事項はおおむね知っていることを前提に出題がなされている。そのため、基本事項（語彙・文法など）をしっかり固めておかないと解答に苦勞をすることがある。単語帳や文法問題集を用いて基礎的な内容を固めることはもちろんのこと、学習の際には「単語の原形だけ」ではなく、名詞なら複数形、動詞ならその活用も含めて体系的に学習するべきである。

2 過去問題を通して解答する順序をイメージしておこう

前半の読解問題は、時間をしっかりかけることで問題を読み解くことができる。しかし、後半の空所補充問題は知識の有無で決まってしまうので、分からない場合に多くの時間を費やしてはいけない。過去問題での演習を通して、時間配分や解答する順序のイメージをつくっておくべきである。その際に、自分にとっての得手不得手なジャンルや出題形式も踏まえることを忘れないようにしたい。

3 社会問題に関心を持つ

英文の題材には現代社会の世相を反映したもの（環境問題、食生活など）が多く出題されている。そのため、日頃から新聞やニュース、本などに積極的にふれて社会問題に関心を持ち、予備知識を有しておくことも有用であろう。

傾向分析 数学ⅠAの知識がまんべんなく身につけているかが問われる

1 出題形式は？

全問がマークセンス方式である。大問Ⅰ・Ⅱの問題は必答問題で、大問Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの問題は3題から2題を選択して解答するので、計4題を解答することとなる。試験時間は、英語または国語と合わせて2科目で60分である。

2 出題内容はどうか？

AO入試は、大問Ⅰから順に「小問集合（2次関数など）」、「データの分析」、「場合の数と確率」、「整数の性質」、「図形の性質」が出題された。一方、推薦入試は、大問Ⅰから順に「小問集合（2次不等式など）」、「2次関数」、「場合の数と確率」、「整数の性質」、「図形の性質」が出題された。

3 難易度は？

AO入試も推薦入試も問題は総じて平易な問題が多く、教科書の例題や問題、章末問題を解くことが出来るようにしておくことが望ましい。また、学校で出題される定期試験を解きなすことも有用な対策である。

受験対策

1 苦手単元がないようにしていこう

数学ⅠAの全範囲からまんべんなく出題されているので、苦手単元があると出遅れにつながってしまう。教科書に記載されている公式や定理は、すぐに思い出して解答する際に使える状態にしておこう。また、数学Aからの出題は選択問題となっているが、どのような分野の問題が出てもいいように練習を積んでおこう。

2 スピードと正確さを両立させよう

大問1題にかけられる時間は7分程度なので、スピーディに解答することが求められる。その中で正確に値を出すためには、日頃から十分な量の練習を積み、問題形式に慣れておく必要がある。また、マークセンス方式で解答する練習もしておくといいで、過去問題を解くなどしておこう。

3 難しい問題への対策も怠らないようにしよう

図形の問題では、言葉による説明のみで図が掲載されていないことが多いため、自分で図を作らなければいけない。普段から作図をし、問題内容をイメージすることに慣れていなければ、手をつけにくい。普段から問題文を読んで図を描くことが出来るように意識しよう。また、パターン化した問題だけではなく、マークセンス方式特有の問題にも慣れていくようにしよう。

傾向分析 漢字や語彙の知識習得と選択肢を吟味する読解力が要求されている

1 出題形式は？

AO入試は大問2題の構成であり、評論文である大問Ⅰが小問7題、知識問題である大問Ⅱが小問2題で構成され、17問構成となっている。一方、推薦入試は大問1題の構成であり、評論文からの出題で16問構成となっている。AO入試、推薦入試のいずれも全問マークセンス方式である。試験時間は英語または数学と合わせて2科目で60分である。

2 出題内容はどうか？

AO入試は大問Ⅰで読解問題以外に漢字問題が6問、大問Ⅱで慣用句の意味を問う問題が2問と四字熟語問題が2問出題されている。一方、推薦入試では小問8題のうち、3題が漢字・語彙・対義語を問う知識問題、空所補充問題を含む5題が文章理解を問う読解問題となっている。なお、両試験とも大問の最後に文章の趣旨を問う問題が出題されている。

3 難易度は？

AO入試では、漢字は漢検準2～4級レベルの漢字が出題され、公募制よりやや難易度が高い。一方、推薦入試では、漢字は漢検の4～8級で出題されるレベルである。AO入試、推薦入試ともに語彙や対義語を問う設問はおおむね基本的なレベルである。また、読解問題は各選択肢が長く、設問の記述がまぎらわしいため、傍線部に対応する記述を精査する必要がある。

受験対策

1 ニュースや新聞をチェックしよう

両入試とも近年のグローバルな課題についての文章を取り扱っているのが特徴である。文章中の用語の背景知識があれば問題を読み解きやすくなるであろう。そこで、日頃から新聞などで時事的な話題をチェックする習慣をつけよう。

2 資格検定を受験することで力をつけよう

両入試とも漢字の出題・配点が大きな割合を占めている。よって、漢字問題をおろそかにすることはできない。しかし、漢字や四字熟語の知識は定着しにくく、興味を持ちづらいことも事実である。漢字検定などの資格試験を具体的な目標にすることが入試までのモチベーションを保ち、継続して学習に取り組む励みとなるであろう。

3 問題数を数多くこなしていこう

両入試とも読解問題は文脈に沿った傍線部の理解を問うものが多く、現代文の問題にある程度慣れていないと解答が難しいものが含まれている。過去問題だけでなく、現代文の問題集を利用して多くの文章題を解き、問題に慣れることが合格への近道となるであろう。

傾向分析 語彙、文法、読解のすべてにおいて基礎的な知識の定着が求められる

1 出題形式は？

大問数は4題で解答数が合計30問である。全問マークセンス方式による四者択一の解答方式となっている。試験時間は60分である。

2 出題内容はどうか？

大問Ⅰは長文読解で、本文の内容と合致する選択肢を選ぶ問題が出題された。大問Ⅱは会話文で、会話文内にある空所を埋めるのに文脈的に適切な台詞を選ぶ設問であった。大問ⅢとⅣはともに短文の空所欄補充問題で、大問Ⅲは単語の意味、大問Ⅳは文法事項が問われた。

3 難易度は？

文章の読みやすさ、問題の解きやすさ等は全体的に平易であり、受験の対策としては基礎的な単語、文法事項を仕上げていけば概ね対応できるものである。

受験対策

1 基礎的な単語・文法を固めよう

扱われている語彙や文法項目はほとんどが基礎的なものである。そのため、単語帳や文法問題集の基本から標準レベルを重点的に学習したい。また、単語の複数形を問う設問もあったことから、単に単語の原形を覚えていくのではなく、複数形や活用を含めて学習するべきであろう。単語帳に書かれている備考欄にも目を通しておこう。

2 読解問題の時間配分に気をつけよう

全体として大きく読解問題と知識問題に分かれている。知識の有無で決まる知識問題は早々に終わらせてしまい、読解問題に多くの時間をかけられるようにしていこう。また、読解問題自体をスピーディーに解けることも大切なので、長文読解のスピードと耐久力をつけて、長文問題が苦でない状態にしておこう。

3 設問を意識して読もう

長文読解について「何を問われるか」は、あらかじめ設問をよんでおけば分かるので、本文を読む前に設問に目を通しておくとよいであろう。そうすることで、本文中で解答の手がかりになる箇所に注意を払いやすくなり、問題をスムーズに解くことができるようになってくる。過去問題を中心に演習を積んでいくことが合格への近道となる。

傾向分析 数学ⅠAの問題をまんべんなくスピーディーに解く力が求められている

1 出題形式は？

全問マークセンス方式である。大問Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの3題は必答問題で、大問Ⅳ・Ⅴ・Ⅵは3題の中から2題を選択して解答する形式となっている。試験時間は60分である。

2 出題内容はどうか？

必答問題では、大問Ⅰが小問集合（式の計算，集合，データの分析），大問Ⅱは2次関数（平方完成，頂点を用いた最小値，場合分けを伴う最小値），大問Ⅲは図形と計量（三角形の存在条件，余弦定理，正弦定理）が出題されている。選択問題は、大問Ⅳは場合の数（同じカードの並べ方の中で，3つの場合についてそれぞれ何通りか問う），大問Ⅴは整数の性質（最大公約数と最小公倍数），大問Ⅵは図形の性質（円周角など，円に関わる角度を問うもの）が出題されている。

3 難易度は？

総じて，教科書で掲載されている問題が中心に出題されているので，日頃の学習の成果が問われる難易度となっている。また，大問Ⅱ以降の(3)は他の問題と比べると若干難しくなっているので，教科書準拠の問題集や市販されている問題集などで応用力を高めておくとよい。

受験対策

1 数学ⅠAの知識を身につけよう

平易な設問が多いので，どの設問も正解率が高いと思われる。また，出題範囲は数学ⅠAの幅広い範囲から出題されている。したがって，「出題されてもほとんど解けない」単元があると出遅れてしまう。いわゆる難関大学対策のような勉強をする必要はないが，教科書の例題や練習問題レベルは確実に仕上げるべきであり，余裕があれば教科書の応用問題まで取り組みたい。

2 スピードと正確さを両立させよう

試験時間は60分であるが，見直しにかかる時間や選択問題のうち，どの問題を解答するかなど考える時間を考慮すると大問1つにかけられる時間は10分程度なので速く解答することが求められる。その中で正確に値を出すためには，日頃から十分な量の練習を積み，問題形式に慣れておく必要がある。また，マークセンス方式で解答する練習もしておくとうよい。

3 何を解答するのか把握しよう

同じ設定の問題でも，人数を答えるのか個数を答えるのか等の設問の違いでマークする解答が変わってくる。また，解答にたどり着くまでに複数の過程を経ていかなければならない問題も出題される可能性は十分にあり，初めの計算で出た値をそのまま解答としては誤答となることもある。問題文を丁寧に読み，何を解答するのか正確に把握しよう。

傾向分析 長めの文章の選択肢を一つ一つ比較・検討する力が必須とされる

1 出題形式は？

出題形式はマークセンス方式で、試験時間は60分である。大問Ⅰ・Ⅱともに評論文で、問1～3の複数解答を含めると16問ずつの構成となり、大問2つで合計32問である。

2 出題内容はどうか？

大問Ⅰ・Ⅱともにほとんど同じ構成となっており、問1が漢字問題、問2が語の意味を問う問題、問3が空所補充問題、問4以降が内容理解問題となっている。

読解問題に関しては共通テストのように、選択肢の文章が長いものが多い。各選択肢の記述内容を十分に検証して解答する必要があるため、事前の対策は必須である。また、接続語などの空所補充や脱文挿入問題も出題されているため、市販されている問題集などの活用もお薦めする。

3 難易度は？

漢字問題は漢検3～7級相当の漢字であるが、誤答の選択肢には準2級程度のものも含まれており、上位級の漢字まで学習する必要がある。また、読解問題は合わせて14問となっており、正確に解くためには、60分の試験時間を目一杯使うことになるであろう。

受験対策

1 過去問題と類似した問題集などを活用しよう

大問2つとも似た傾向の問題であるため、過去問題を何度も解き、問題傾向と解法をしっかりと確認しておきたい。また、扱っている文章の文字数も多いため、文章を早く読んでいく能力も求められる。さまざまなタイプの問題が出題されているため、苦手な出題形式の問題がある場合は、解説の詳しい問題集を別途用意し克服することが重要である。

2 センター試験や共通テストの過去問題を解こう

読解問題はセンター試験や共通テストを意識した選択肢のつくりになっている。このタイプの問題集は書店などで入手しやすいので、早い段階で手に入れ、解いておくことをお薦めしたい。その際、大問1つにかかった時間などを記録しておき、次に解くときはその時間を少しでも縮められるようにするなど、目標を決めて解いていくようにしていこう。

3 さまざまなテーマに興味を向けよう

科学論をはじめとしてさまざまなテーマを扱った文章を用いた問題が出題されており、幅広い教養をもって読解に臨む必要がある。普段からさまざまなテーマの本を読むなどして、幅広い教養を身につけるよう準備をしていくことが求められる。読書の習慣がない人は短めのものからでも構わないので、本を読む習慣をつけていこう。

傾向分析 細かく正確な知識を必要とする問題が多く、応用問題にも注意が必要とされる

1 出題形式は？

大問数4題、小問数30問弱からなるマークセンス方式の試験である。各大問はAとBに分けられていて、1～2つの文章・実験内容を読んで解答する形式となっている。試験時間は60分である。

2 出題内容はどうか？

生物基礎（生物の特徴、生物の体内環境、および生態系とその保全）と生物（生命現象と物質、生殖と発生）の分野から、細胞・細胞とエネルギー、免疫、炭素循環と生態系、生殖細胞と精子の構造、遺伝情報の変化、神経系（自律神経系、脳）が出題されている。

3 難易度は？

実験問題を含めて、教科書の内容をベースに幅広く出題されていて、基礎～標準レベルである。ただし、細胞、遺伝子、その他についても細かい部分まで聞かれていることに加えて、まぎらわしい選択肢が並ぶことがあるため、注意しておきたい。

受験対策

1 似た言葉の違いを把握しよう

基礎的であるが、細かな知識の問が多い。そのため、一つ一つの用語の意味や役割、用語どうしの相互関係を正確に把握しておく必要がある。対策として、似ている言葉が出てきたときにまとめて書き出せる一覧表を手のひらサイズのノートなどに作成することをお薦めする。通学や休み時間など余裕のあるときに確認することができるようにしよう。

2 問題文を精読する癖をつけよう

大問Ⅰの問1や大問Ⅲの問3のような問題では、問題文の内容を細かに捉える必要がある。問題を読んですぐに選択肢に飛びつかずに、問題文をじっくり読み、「何について問われているのか」、「どの時期に関する問いなのか」、「どの条件に対するものなのか」を正確に判断しよう。しかし、これは「気をつけよう」という思いだけで一朝一夕に習得することができるものではない。日々の過去問題演習ではもちろんのこと、用語の暗記、実験の学習時にも意識して取り組もう。

3 実験問題の対策を十分に行おう

実験・考察問題はどれも標準的な内容で、よく出題されるが、条件の見落としが致命的となる。実験問題ごとに注目すべき事柄が決まっているので、教科書で実験を確認することはもちろんのこと、センター試験や共通テスト、模擬試験に出題されている実験問題に取り組み、問われやすいところを確認しておこう。